

Title	賛美歌を歌い霊性を生み高めるために(中)
Author(s)	内藤, みち
Citation	聖学院大学論叢,19(1) : 47-59
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=49
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

賛美歌を歌い霊性を生み高めるために（中）

—— 文語語彙・文型（動詞・形容詞・名詞）の現代語への変換法 ——

内 藤 み ち

Singing Hymns to Strengthen Spirituality (II)
Grammatical Rules to Change Classical Japanese to Modern Japanese:
“Verbals, Adjectivals and Nominals”

Michi NAITO

In order to sing hymns to strengthen spirituality, it is necessary to understand the meaning of each word in a hymn written in classical Japanese. Classical words of hymns sung often at school worship services are examined and “verbals”, “adjectivals”, and “nominals” are pointed out. Some classical Japanese words have simple grammatical rules. Some have the same form as modern Japanese but different meanings, usages, and so on. The rules to change classical Japanese into modern Japanese are introduced. Unlike native speakers of Japanese, Japanese language learners have more ability to master even classical Japanese by expanding grammatical rules of modern Japanese that they have already mastered.

Key words: spirituality, Hymns, Classical Japanese, Grammatical exchange rules, Technical acquisition

1 はじめに

信仰生活に触れながら学生生活を送るミッションスクールにおいては、その霊育の下に過ごした数年間が卒業後においても人生を支え導く道標となる。

賛美歌は、信仰に対する精神と感覚を呼び覚ます霊性を生み高める。その時間的普遍性ゆえに、学校礼拝で歌われた賛美歌はそこで育った学生の人生と共にあり、時を得たときに精神の糧となる。聖学院大学速水優名誉理事長も、日本銀行の総裁に就いていた1998年～2003年の時を振り返り、自身に味方する者が誰一人いない等の難しい場に臨む時に『こどもさんびか』35番⁽¹⁾「主われを愛す」を心のうちで歌い、神と共にあることを覚えていたと語ったことがある。その賛美歌は幼少時代にクリスチヤンスクールである聖学院幼稚園で過ごした時に歌っていた賛美歌であるという。

賛美歌の歌詞は敬虔で崇高であり、その多くは格調高い文語体⁽²⁾で書かれている⁽³⁾。歌詞を深く理解し自身の言葉として意味を噛み締めながら歌わなければ、賛美歌を心に共鳴させ靈性を生み高めることは難しい。日本語を外国語として学ぶ留学生が文語体の歌詞内容を理解するために、既知の日本語⁽⁴⁾とは異なる文語の語彙や文型規則を取り出して習得することは不可欠である。文語体の語彙・文型の中には、現代語と同じ語彙・文型も存在するが、多くその学習は日本語レベルの高い時期に行われるため、現代語の学習においては未学習であることが多い。現代語に同様の語彙・文型があるものの、文語の意味や文法規則に現代語との差異がある場合もある。賛美歌の歌詞を理解する上で、文語体の語彙・文型は早い段階で導入すべきである。

本稿では、日本語学習者が賛美歌の歌詞を理解するために、学校礼拝において数多く歌われている賛美歌の歌詞より、動詞・形容詞・名詞の3品詞の文語の語彙・文型を取り出し、日本語学習者が既に身に付けている現代語の語彙・文型及び意味への変換方法を分析する。

2 賛美歌⁽⁵⁾

賛美の歌を一般に賛美歌という。賛美歌に当たる英語ヒム（hymn）はギリシャ語のヒュムノス（hymnos）を語源に持ち、神々や英雄を讃えて歌う歌を意味している。

広義では信仰を歌う歌を指す。狭義ではキリスト教の礼拝や集会等で歌われるキリスト教の神を賛美する歌を指し、その総数は約50万とされる。⁽⁶⁾

聖学院大学では毎年約100回の全学礼拝がもたれ、「頌栄」⁽⁷⁾以外に歌われる賛美歌は、ほぼ礼拝毎に異なる数多くの奨励者や説教者が選出している。その多くが『讃美歌』より選曲されている。⁽⁸⁾ 1995年度～2004年度の10年間に歌われた賛美歌は延べ約1000曲、そのうち2回以上使用された同じ曲番の賛美歌を1曲と数えると約260曲の賛美歌が使用されている。

3 文語体の歌詞

本稿では、表1の使用回数7回以上（33曲）の賛美歌及び礼拝において数多く使用された頌栄5曲⁽⁹⁾より文語体の歌詞を取り出し、そのうちの動詞・形容詞・名詞の中で、特に多く使用されている語彙・文型の現代語への変換規則を記述する。

表1 学校礼拝において使用された賛美歌⁽¹⁰⁾

使用 回数	賛美歌曲番					
	※ 「 」はタイトル牽引となる、賛美歌の初行である。 ※ 曲番号のみは『讃美歌』から、Ⅱとあるのは『讃美歌第二編』からの賛美歌を指す。					
7回	187 「主よいのちの」	326 「ひかりにあ ゆめよ」	333 「主よわれをば」	453 「きけやあい のことばを」	520 「しずけきか わのきしべを」	Ⅱ 25 「うたごえ高 らかに」
8回	272 「ナザレのふ せやに」	308 「いのりはく ちより」	310 「しずけきい のりの」	355 「主をあおぎ みれば」	511 「みゆるしあ らずば」	
9回	285 「主よみても て」	338 「主よおわり まで」	450 「わかきひの みちを」	517 「われにこよ と主はいま」	Ⅱ 57 「あらしのあ とに」	Ⅱ 188 「きみのたま ものと」
10回	243 「ああ主のひ とみ」	502 「いともかし こし」	234 A 「むかし主イ エスの」	Ⅱ 167 「われをもす くいし」		
11回	291 「主にまかせ よ」	313 「このよのつ とめ」	354 「かいぬしわ が主よ」			
13回	294 「みめぐみゆ たけき」	352 「あめなるよ ろこび」	Ⅱ 1 「こころをた かくあげよう」			
14回	494 「わがゆくみち」					
15回	332 「主はいのちを」					
16回	121 「まぶねのなかに」	452 「ただしくき よくあらまし」				
23回	270 「しんこうこ そたびじを」					
35回	312 「いつくしみ ふかき」					

3-① 動詞

使用されている動詞は約300種類あり⁽¹¹⁾、同じ動詞の語彙が複数回使用されているのを延べであらわすと全部で約420語となる。そのうち、同じ動詞の語彙が最も多く使用されているのは「ある」26回、次に「なる」23回、そして「恵む」21回である。20回～11回使用された動詞は以下の通りである。「救う」16回、「祈る」14回、「栄える」「なす」13回、「光る」「見る」「ゆく」「来る」12回である。10回～5回の使用は、「与える」「悩む」「喜ぶ」9回、「歩む」「いつくしむ」「帰る」8回、「あげる」「受ける」7回、「在ます^い」「変わる」「来る^{きた}」「ささげる」「進む」「待つ」「迷う」「導く」

「持つ」6回,「たたえる」「得る」「聞く」「呼ぶ」5回である。残りの延べ約100語は使用5回未満の動詞である。動詞の語彙で多く使用されている文語の文型規則は, [字引形]⁽¹²⁾と[て形]⁽¹³⁾である。それら2つの文型の使用法及び表出している意味は, 留学生がすでに学んでいる現代語と同じものである。文語の[字引形]と[て形]の形(フォーム)は現代語と異なる。

3-①-i 動詞の[字引形]

日本語学習者が現代語を学ぶ場合, 動詞は表2の4種類に分類される。

表2 現代語の動詞の分類⁽¹⁴⁾

U動詞	RU動詞	不規則動詞	ARU動詞	
__U#	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> __IRU# __ERU# </div>	する くる	ごZ なS くだS おっSH いらっSH	ARU# ARU# ARU# ARU# ARU#
	例外 入る 走る 帰る 他			

約300種類の動詞のうちの約1割, 29種の動詞は現代語と異なる[字引形]を持つ文語であり, そのうちの25種の動詞の[字引形]は, 表3と表4の文型規則を使用してすべて現代語の[RU動詞]の[字引形]に変換することが可能である。まず, 文語の[字引形]の語尾がUまたはURUであるかによって, 2グループに分ける。語尾がUのグループの文語の[字引形]⁽¹⁵⁾は, 語尾Uを除いた後IRUまたはERUを加えて現代語の[字引形]とする。語尾がURUのグループの文語の[字引形]は, 語尾URUを除いた後, IRUまたはERUを加えて現代語の[字引形]とする。ただし, 語中でYEとなった場合は, 「え」と表記し発音する。IRUを加えるかERUを加えるかは[字引形]からは導き出すことはできないので, どちらを加える動詞であるかは提示される必要がある。礼拝で多く使用された賛美歌の中の動詞では, 20語がERUに, 5語がIRUに変換される語彙であった。

表3 文語の[字引形]から現代語への変換規則「IRU変換動詞」

IRU変換動詞	
いK	URU
ころM	URU
みT	URU
いK	U
ほろB	U

IRU変換動詞		
いK	IRU	生きる
ころM	IRU	試みる
みT	IRU	満ちる
いK	IRU	生きる
ほろB	IRU	滅びる

表4 文語の〔字引形〕から現代語への変換規則「ERU変換動詞」

ERU変換動詞		ERU変換動詞		
あTA	URU	あTA	ERU	与える
あふR	URU	あふR	ERU	溢れる
かくR	URU	かくR	ERU	隠れる
きこY	URU	きこY	ERU	聞こえる
きよM	URU	きよM	ERU	清める
くずR	URU	くずR	ERU	崩れる
せM	URU	せM	ERU	責める
つよM	URU	つよM	ERU	強める
つG	URU	つG	ERU	告げる
ひらK	URU	ひらK	ERU	開ける
あた	Y	あた	ERU	与える
うK	Y	うK	ERU	受ける
おそR	Y	おそR	ERU	恐れる
くらB	Y	くらB	ERU	比べる
ささG	Y	ささG	ERU	奉げる
すT	Y	すT	ERU	棄てる
そM	Y	そM	ERU	染める
ながR	Y	ながR	ERU	流れる
もとM	Y	もとM	ERU	求める
もY	Y	もY	ERU	燃える

3-①-ii 動詞の〔て形〕

現代語の動詞の〔て形〕は、その〔字引形〕から表5の規則によって作られる。⁽¹⁶⁾

表5 現代語の動詞の〔て形〕規則

U動詞	RU動詞	不規則動詞	ARU動詞
__う# → __づって __つ# → __づって __る# → __ゐって __す# → __ずして __く# → __ぐいて __ぐ# → __ぐいで __ぬ# → __ぬんで __ぶ# → __ぶんで __む# → __むんで	__る# → __ゐて	する → して くる → きて	__ARU# → __ARUって

38曲⁽¹⁷⁾の賛美歌には、延べ約80種類の〔て形〕の動詞が使用されている。それら〔て形〕動詞の

表わす意味は、「手段」或いは「接続」の意味となり現代語の〔て形〕のもつ意味と同じである。ただ、現代語と文語の〔て形〕のフォームは異なる⁽¹⁸⁾。文語ではU動詞とRU動詞の〔て形〕文型規則は表6にあるように1つである。文語の〔て形〕作成規則は、動詞の〔語幹〕⁽¹⁹⁾に「て」を加えるもので、現代語のそれに比して非常に単純化されている。⁽²⁰⁾ただし、「持つ」は例外として発音変化を伴って「持て」の形で使用されている。38曲の賛美歌に使用されている〔て形〕の4割近くに当たる約30語はU動詞の〔て形〕で、現代語にはない文語体の〔て形〕であるので、新たな規則を学ぶことによって既知の現代語の〔て形〕を導き出す方法を習得する必要がある。その他の約6割の〔て形〕は、すべて現代語においても文語においても同じフォームとなるRU動詞の〔て形〕であり、新たな学習は必要としない。ARU動詞は現代語の〔語幹〕ではなく、文語の〔語幹〕を使用し、「ござRU + I + て」「なさRU + I + て」「くださRU + I + て」「おっしゃRU + I + て」「いらっしゃRU + I + て」となる。従って、現代語のARU動詞の5語以外で、動詞の〔語幹〕に「て」がついて〔て形〕となっている場合は、文語のU動詞であり、現代語のU動詞の〔字引形〕を導き出して表5の現代語の〔て形〕規則を当てはめることによって、現代語の〔て形〕を導き出せる。また、全5種のARU動詞が「ござRU + I + て」「なさRU + I + て」「くださRU + I + て」「おっしゃRU + I + て」「いらっしゃRU + I + て」とある場合は、「り」を「っ」に変えることによって現代語のARU動詞の〔て形〕のフォームとなる。

表6 文語の動詞の〔て形〕規則

U動詞	RU動詞	不規則動詞	ARU動詞 ⁽²¹⁾
〔語幹〕て			例外：「持つ」⇒「持て」

3-② 形容詞⁽²²⁾

38曲の歌詞に使用されている形容詞は50種余りあり、同じ形容詞が2回以上使用されている場合は約半数ある。同種の形容詞が5語以上使用された語彙は、「きよい」7語、「深い」「こよなき」6語、「しずけき」「若い」「高い」5語となる。現代語と同形の語⁽²³⁾は約40種ある。

3-②—i 【い形容詞】

文語の「難しき」「美しき」「正しき」等の語は、約50回使用されている。語彙の意味は現代語の【い形容詞】と同じで、新聞の見出しやキャッチフレーズそして詩や小説等の現在使用されている日本語の中にもそれらの文語は多く使用されている。ただし、現代語の学習においては上級で学ぶ文型規則である。現代語への変換規則は、表7にあるように語尾の「き」を「い」に変えるというものである。

数少ないが現代語に規則だてて変換するに難しい語彙が存在している。「直き」「全き」「くしき」「しげき」等がそれである。上に述べた文語から現代語への変換規則はこれらの語彙には当てはまらず、規則から現代語を導き出すのではなく、文語の語彙の意味に適した現代語を当てはめて語彙をそのまま習得する。

表7 文語から現代語の〔い形容詞〕への変換規則

__き# → __ぎい#

3-②-ii 〔い形容詞〕の〔し形〕⁽²⁴⁾

「いとたのし」等の語尾が「し」で終わる形容詞が約20使用されている。現代語へは、文語の語尾の「し」に「い」を加えて現代語の〔い形容詞〕に変換する。

3-②-iii 〔な形容詞〕

38曲中に使用されている9種（あらわな、うららな、完全な、さだかな、しずかな、たからかな、つぶさな、豊かな、わずかな）、延べ12語の〔な形容詞〕は現代語のフォームと同形で意味も同じであるので、特別な文型規則等の導入は必要ない。

3-②-iv 〔な形容詞〕

38曲中に語尾が「けき」とある語が4種、「きよけき」（2語）、「しずけき」（5語）、「安けき」（1語）、「ゆたけき」（2語）の延べ10語使用されている。それらの語彙の現代語は、表8にあるように文語形容詞の語尾「けき」を除き、「かな」または「らかな」を加えて導き出すことができる。⁽²⁵⁾「かな」と「らかな」のどちらを加えるかは、語彙を2グループに分類して学習する必要がある。

表8 文語から現代語の〔な形容詞〕への変換規則

__けき# → __らかな#	__けき# → __かな#
きよ・けき → きよ・らかな	しず・けき → しず・かな
やす・けき → やす・らかな	ゆた・けき → ゆた・かな

3-③ 名詞

動詞から作成され、動詞の〔語幹〕が〔名詞〕となっている語を除いても、約200種類の名詞が38曲中に使用されている。その中で、最も多く使用された語は「主^{しゅ}」107回である。次いで半数以下の「我^{われ}」45回。そして、「心」30回、「世」26回、「人」24回、「神」23回となる。10回以上使用さ

れた名詞を表9に記入する。

表9 賛美歌の中の名詞

使用回数	名 詞		
107 回	主 ^{しゅ}		
45 回	我 ^{われ}		
30 回	心		
26 回	世		
24 回	人		
23 回	神		
18 回	きみ		
17 回	イエス	身	
15 回	道		
13 回	時	力	
12 回	愛	今	友
11 回	生命 ^{いのち}		
10 回	声	つみ	靈 ^{たま}

38曲中の名詞で、現代語での使用が少ない語彙は、「天」^{あめ}⁽²⁶⁾「きみ」^{たま}「我」^{われ}の4種である。

3-③-i 「天」^{あめ}

天地の「天」^{あめ}である。38曲中5語であるが、礼拝において賛美歌以外にも多く使用される語である。「主の祈り」のアンケート⁽²⁷⁾では、平仮名で書かれた語彙「あめつち（天地）」について質問したところ、全回答者27名のうち1名が「天と地」と正しく記入した。他3名がそれぞれ「雨土」「飴土」「甘面」と記入し、残りの23名は無記入となっている。母国の中国においても長年教会生活を送っている日本語能力上級の朝鮮語母語話者である聖学院大学の卒業生1名に同じ質問をしたところ、「主の祈り」の内容についてはすべて把握しており現代語の日本語に完璧に書き直していたが、唯一「天地」という語彙の理解はできていなかった。アンケート用紙には「よく分かりませんでした。色々な賛美歌によく使用されている語ですね。」と記入されていた。日本においても毎週欠かさず通っている教会で頻繁に見聞きした語彙であるが、日常生活の中で触れることのない語彙であることが意味の把握がなされていない原因と考える。「天」^{あめ}の語の説明をする必要がある。

3-③-ii 「きみ」

「わがきみイエス」等の表現の中で18回「きみ」という語彙が使用されている。現代語にも「きみ」という語彙はあるが、その意味は英語のYOUに当たり、発話者と呼びかけられる人との上下関係や力関係等によって使用が限定され、「きみ」の使用が適している場合もあれば不適切で失礼となる場合もある。上司が部下を呼ぶ時は使用できる場合もあるが、目下の者が目上の者を呼ぶ呼称と

はならない。目下に対しての発話においても単に上下関係を表出したり、相手を敬い対等として扱う意に使用されるなど、人間関係によって様々なケースがある。男女の社会方言²⁸⁾にもその使用は関係してくる。日本語学習者は日本語学習の初級あるいは中級レベルの段階で現代語の「きみ」という語彙を学ぶが、その使用対象が限られていることが強調される。賛美歌の歌詞にある文語の「きみ」は、留学生が初中級で学ぶ「きみ」とはその使用が大きく異なり、身分の高い人に対してや敬意を込めた意味で使用される。その異なりを説明する必要がある。

また、「主にまかせよ、汝が身を」等、「^な汝」という語彙が4語使用されている。「きみ」或いは「^{われ}我」と共に、発話対象者と話者との人間関係をも含めて「^な汝」も導入する。

3-③-iii 「^{われ}我」

「われ何をなして主にむくいし」や「われらのところを」等の表現で「我」が人称代名詞として約50回使用されている。留学生は「我々」や「我ら」等の語彙を中上級で学ぶ。『讃美歌』においての「我ら」は現代語のそれとほぼ同じではあるが、現代語が意味する以上の範囲を持つ。現代語の「我」は「私」にすべて置き換えられることはなく、多く演説などの限られた状況の中で「私達」を指す「我々」という語彙の中で使用されている。文語の「我」は現代語の「私」と置き換えて使用できる。文語の「我」は文語学習の早い段階から学習すると同時に、現代語の意味や語彙の使用方法との差異について取り上げる必要がある。

「我」と同時に、「わが主」等の「^わ我が」についても現代語との意味の差異を取り上げて導入する。「わが」も40回余りと数多く使用されている。

3-③-iv 「^{たま}霊」

「^み御霊」という語彙で約10語使用されている。美化語の接頭語「^み御」と共に使われる語彙であるので、接頭語「^み御」と共に文語の「^{たま}霊」の意味を導入する。

表10 「^みたま」の回答²⁹⁾

回答者	「 ^み たま」の意味	在学期間	日本語レベル
1	御宝	1	上級
2	たましい	1	上級
3	大仏が持っているたま	1	中級
4	見玉	1	中級
5	魂	3	中級
6	遺骨をいれるもの	4	中級
⑦	魂	3	上級
⑧	祝福	4	中級

留学生27名⁽³⁰⁾に平仮名で書かれた「みたま」の意味を何も見ずに記入してもらったところ、8名が表10にあるように回答した。19名が回答していなかったことから、現代語での使用頻度が少ない「^{たま}霊」を理解している日本語学習者はほとんどいないことがわかる。

3-④ 接語

名詞に関連した文型として、「^み御」と「^ら等」の2つの接語の導入をする。

3-④—i 接頭語「御（み）」⁽³¹⁾

「^{みこ}御子」「^{みな}御名」「^{みちから}御力」等、100回以上使用されている。現代語では「み」と使用されることは殆どない。現代語とするには「お」や「ご」に置き換えることで容易に定着する。ここでも現代語の「お」と「ご」が文語では「み」と1つになり単純化されている。「主の祈り」アンケート結果⁽³²⁾から、多くがこの美化語を把握していなかったことがわかる。敬語の意を理解しているかどうかの問題以上に、数多く使用されている「み」を接頭語として理解していないということはそれに続く名詞をも理解できていないということに繋がる。名詞は、そのほとんどが文語・現代語に関わりなく同一の形で使用されている。歌詞に「み」が歌われる毎に美化語であると理解できればその語に続く語彙をも容易に理解できる。

3-④—ii 接尾語「^ら等」

「我^ら」等、約30回使用されている⁽³³⁾。現代語の「我^ら」と同様に複数を表わす。日常、数多く見聞きするが、学習レベルは日本語中上級である。従って、「主の祈り」のアンケート⁽³⁴⁾対象者である中上級レベルの日本語学習者の多くはその意味を把握している。が、今回初級レベルの日本語学習者約10名に「^ら」の意味を質問したところ、3名しかその意味を把握していなかった。現代語においても使用される「^ら等」ではあるが、文語学習においては早い段階での学習となる。また、現代語の「^ら達」との意味の差異についての説明が必要である。

4 おわりに

賛美歌の歌詞にある文語を理解するには、その文語での日本語のインプットのみが必要となり、日本語学習者が文語で発話することや文章を書くというアウトプットの必要はない。加えて、文語の文型規則は現代語に比べ単純化されているものが多く、文語から現代語を導き出すことは容易と考えられる。文語の名詞の接頭語の「^み御」も現代語においては「^お御」「^ご御」の2つの読み方となるが賛美歌の歌詞の文語においては「み」となっていたり、文語の動詞の「^みて形」規則も1つである。日本語学習者にとって第二日本語として方言や文語を学ぶことは、既に身に付けている日本語（標

準語) 学習の延長線上の学習となる。文語の動詞・形容詞を現代語にする方法は、既知のストラクチャーを変換させる文型学習となり難しい学習とはならない。文語の名詞や、名詞に関係する接語は、学習するに留意する必要があることがわかる。それは、現代語の名詞にも同じ語彙が多くあるが、その意味や使用可能な対象などが文語と現代語では異なるからである。

留学生は公式的⁽³⁵⁾に現代語を習得し、技術的⁽³⁶⁾に文語を習得した後に、クリスチャンスクールでのキャンパスライフを通し非公式的⁽³⁷⁾な信仰の学びが可能となる。その非公式的な習得は、在学期間が長くなるほどに深まるものであるゆえに、学生生活において触れる賛美歌にある文語の早い時期での習得が望まれる。

注

- (1) 『こどもさんびか』35番は、『讃美歌』461番と同じ賛美歌である。
- (2) 本稿でいう「文語」は「古語」を含んでいる。その対象にあるのは、日本語学習者が日本語を学習するときに最初に学ぶ「現代語(大抵は標準語)」や「口語」を指す。「文語」或いは「古語」の一部は現代語にも使用されている。文型規則が異なる場合や、表出する意味が異なる場合などさまざま、入り組んでいる部分がある。
- (3) 賛美歌の歌詞は文語体だが、表記は現代仮名遣いである。
- (4) 現代語の日本語、大抵は標準語の現代語である。
- (5) 讃美歌とは特定の歌集を指す。
- (6) 現在、日本のプロテスタント教会で使用されている主な賛美歌集は『讃美歌』『讃美歌第二編』『ともにうたおう』『讃美歌21』『聖歌』『新聖歌』等である。『讃美歌』『讃美歌第二編』『讃美歌21』は、国内のプロテスタント信徒数の3分の1を有する国内最大の教団である日本基督教団によって作成された。『聖歌』『新聖歌』は、福音派の教会において最も多く使用されている。それら『讃美歌』と『聖歌』には本質的な差異はなく同じ賛美歌をも多く載せている。
- (7) 三位一体への賛美において歌われる賛美歌である。
- (8) 聖学院大学では、入学時に『讃美歌第二編付』を全学生が購入している。
- (9) 『讃美歌』の539番, 541番, 543番, 545番, 546番の5曲である。
- (10) 拙稿「賛美歌を歌い霊性を生み高めるために(上)」『聖学院大学論叢』第18巻 第3号, 2006年, pp.269-270
- (11) 動詞の「ます形」から「ます」を省いた形である「語幹」からなる名詞は、その品詞を動詞に分類した。
- (12) 「字引形」とは、動詞の普通体の非過去の肯定の形である。
- (13) 「て形」とは、「～てください」などの表現に使用されている形「～て」を指す。
- (14) 分類された動詞の名称は、日本語の教科書によって様々である。例えば、本稿でU動詞としている動詞グループは、五段動詞, 子音語幹動詞, 強変化動詞, I類動詞等とも呼ばれる。RU動詞, 不規則動詞, ARU動詞も同様に多くの名称を有する。
- (15) 文語の動詞の「字引形」は、文中の使用される場所により、その「字引形」の形が異なる。
- (16) U動詞の「行く」は、現代語の「て形」規則の唯一の例外であり、U動詞の「て形」規則を当てはめた形の「行いて」とはならず「行って」となる。
- (17) 本稿でいう38曲とは、表1にある学校礼拝において使用された賛美歌33曲と頌栄5曲⁽⁹⁾を指す。
- (18) 現代語と異なるフォームを持つ文語の「て形」とは、「湧きてながる」等の表現に使用されている「湧きて」などの「て形」を指す。
- (19) 「語幹」とは、「ます形」から「ます」を除いた形を指す。

- (20) 現代語〔て形〕の唯一の例外である「行く」の〔て形〕も、文語体では例外とはならず〔行きて〕となる。ただし、「行く」からは文語の〔語幹〕は作られない。
- (21) 文語の ARU 動詞の〔語幹〕は、U 動詞と同じように作成される。言い換えるならば、文語においては ARU 動詞と U 動詞は 1 つのグループ分類となる。
- (22) 日本語学習においては形容詞は 2 種類に分類される。本稿では〔い形容詞〕〔な形容詞〕という名称を使用する。
- (23) 文語での語末は、現代語の語末「い」ではなく、「き」となる場合がある。
- (24) シク活用の語彙である。
- (25) 規則が適応しない語彙もある。
- (26) 38曲の歌詞の中での使用回数は 5 回である。
- (27) 注10, pp.273-285
- (28) 一般にいう方言を「地方方言」とし、社会における属性(性別・年齢・職業等)の違いによって異なる日本語を「社会方言」という。
- (29) 番号についているダイヤ印はクリスチャンであることを意味している。アンケートに未記入の 2 名のうち、日本語レベル上級の中国語母語話者 1 名は「み」が尊敬の意を持つことは知っていたが「たま」の意は理解していなかった。他 1 名の卒業生は「み」は現代語の「ご」「お」に当たる」と記入し、「ここでは神様を指す。「あなた様」の意味」と回答した。
- (30) 2005年10月、聖学院大にて、中上級レベルの日本語能力をもつ留学生27名を対象にアンケート調査を実施した。
- (31) 『聖書』から抜粋された46篇からなる祈祷の内容をもつ儀式用の文「交読文」においても、使用されている接頭語の最も数多いのは「御」であり、32回と接頭語の使用回数61回の半数以上を占めている。(拙稿「交読文の語彙について」『講座 日本語教育』第26分冊, 1991年, p.85)
- (32) 注27
- (33) 「交読文」に使用されている「等」も37回と、接尾語全体の半数を占めている。(注31に同じ)
- (34) 注27
- (35) 一定の基準となる形式に合致させ、それから外れると誤りとして訂正され、2 元的の二者択一により矯正されるという二方向のプロセスによって一定形式を身につける習得法。現代語の日本語学習がそれに当たる。
- (36) 高度に意識された習得という特徴があり、習得は一方交通でなされ、その場に教え手が居なくても学習は成立する。公式的及び非公式的な学習を含み、既に基礎的な日本語を身に付けている留学生が賛美歌にある文語体の語彙や文型規則を学ぶ場合がこれに当たる。
- (37) 何を手本として模倣するかは重要であるが無意識に行われ、「何かを習得していること」や「一定の形式或いは法則の存在」をも意識されることが少ない。信仰への歩みがそれに当たる。

参考文献

- 泉治典「疑問感じるリタージュの強調」『福音と世界』1997年 6 月号 pp.26-27
- 大塚野百合『賛美歌・唱歌ものがたり』創元社 2002
- 大塚野百合『賛美歌・聖歌ものがたり』創元社 1995
- 大塚野百合「たましいに響く歌を」『福音と世界』1997年 6 月号 pp.19-22
- 太田聡「礼拝奏楽者の立場から」『福音と世界』1997年 6 月号 pp.23-25
- 唐津東流「礼拝における賛美歌の意味と機能——「賛美歌21」の諸問題——」日本教会音楽研究会 2001
- クリスチャン新聞『クリスチャン情報ブック2004』いのちのことば社ジャーナル出版事業部 2003
- 三瓶長寿「二十世紀の礼拝改革と『賛美歌21』」『福音と世界』1997年 6 月号 pp.8-13
- 白井健策『賛美歌への招待——音楽随想』日本基督教団出版局 1999
- 『聖書』日本聖書教会 1968
- 手代木俊一『賛美歌・聖歌と日本の近代』音楽之友社 1999

戸田義雄・永藤武編著者『日本人と讃美歌』桜風社 1978

内藤みち「交読文の語彙について」『講座 日本語教育』第26分冊, 1991年, pp.79-104

内藤みち「賛美歌を歌い霊性を高めるために(中)」『聖学院大学論叢』第18巻 第3号, 2006年, pp.265-287

中村信一郎「戦争責任告白としての『讃美歌21』」『福音と世界』1997年6月号 pp.33-39

日本基督教団教育委員会編『こどもさんびか』日本基督教団出版部 1953

日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌・讃美歌第二編』日本基督教団出版局 1971

日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21』日本基督教団出版局 1997

日本基督教団編『日本基督教団年鑑 2005』日本基督教団出版局 2005

原恵『賛美歌——その歴史と背景』日本基督教団出版局 1980

松山與志雄「現行『讃美歌』の補足として試用する」『福音と世界』1997年6月号 pp.14-18

松山與志雄「『讃美歌21』の再検討1」『福音と世界』1999年4月号 pp.41-48

松山與志雄「『讃美歌21』の再検討2」『福音と世界』1999年6月号 pp.54-59